バカとテストと召喚獣　居眠り病の幼馴染

黒ウサギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと召喚獣　居眠り病の幼馴染

【Ｎコード】
Ｎ４３７５Ｍ

【作者名】
黒ウサギ

【あらすじ】
幼馴染であり親友の吉井明久と共に、文月学園に入学した少年の友情あり、恋愛ありの学園生活。
※書いてある通り主人公は吉井明久の幼馴染で親友です、またヒロインは島田美波となっていますのでご注意ください。

第一問

「アキ、起きろ！」

そう言って俺は目の前のドアのチャイムを鳴らす。

時間は遅刻ぎりぎり、今日は入学式なので早めに行きたかったがアキを置いていくことはできない。

なんでアキは入学式の日に寝坊するかな、携帯にも連絡したがつながらない、おそらく充電を忘れて電池切れなんだろう。

間が悪すぎる。

そのままチャイムを５０回ぐらい押し続け、やっとつながった。

「ふぁい、吉井です」

眠そうな声でインターホンから声が聞こえてくる。

「アキ、起きろ、遅刻するぞ！」

「えっ……うわっ、もうこんな時間！？ちょ、ちょっと待ってて眞也」

そう言ってインターホンが切れ、部屋の中からドタバタとした音が聞こえた。

それから三分後、部屋の中から出てきたのは、薄い茶色の髪をした

男。

俺の幼馴染で親友である吉井明久だ。

なぜか上着だけセーラー服だが。

「おはよう、アキ」

とりあえず制服の方は気にしないで、いつものように挨拶する。

「うん、おはよう眞也」

「なあ、なんでセーラー服なんだ？」

「……慌てて身近に有った制服を着たらこれだったんだけど……違うみたいだね」

俺の着ている制服を見ながらそう言ってくる。

「日本の学校の男子制服でセーラー服は確実にないだろう」

「わからないじゃないか！もしかしたら画期的な学校で男子の制服がセーラー服という初の試みになってるかもしれないじゃないか」

「いや、制服のサイズ合わせでブレザー着ただろう？」

制服の採寸はアキと一緒に行ったからアキも覚えていると思ったんだけど……ゲームのしすぎで忘れたのか？

「……着替えてくる」

「いや、そろそろ行かないと間に合わないんだけど」
部屋に戻ろうとするアキにそう声を掛けた。
たぶん全力で走ってギリギリで間に合うぐらいの時間だ。
事前に道を完全に覚えておいてよかった。
道に迷う心配だけはない。
「うっ、入学式から遅刻はまずいよね」
「間違いなくな」
親の呼び出しはないだろうが連絡ぐらいいくだろう。
俺はともかくアキにとってはまずい。
俺もアキも両親が仕事で一人暮らしをしていることになっている。
アキの場合は一人暮らしをかなり喜んでいるのだが下手な事をすると姉の玲さんが戻ってくる可能性がある。
なのでアキにとっては入学式早々何か起こしてしまうのは色々とまずいのだ。
「ううっ、じゃあ、いいやこれで行くことにするよ」
「初対面の印象が可笑しな人になるだろうが……今更か」

「眞也、それじゃまるで僕が常日頃から可笑しな行動をしているみたいじゃないか！」

「可笑しな行動はしていないが、問題の回答とか、かなりの珍回答になってて面白い人扱いされていただろうに」

まあ、中学の頃は三年になるとみんな微笑ましそうな目で見ていたが。

「……」

「とりあえず、家の鍵を閉めていくぞ」

首を傾げて考え込むアキにそう言う。

「あ、うん」

「じゃあ行くか」

アキが鍵を閉め終えたのでそう言う。

「全力で走らないと間に合わないね」

「ああ……ところでハンカチは持ったか？」

「うん」

「ちりがみは？」

「持ってる」

「筆記用具も忘れてないよな？」

「大丈夫」

「よし、それならいい、全力で行こうか」

「了解」

そういつものやりとりをして、俺とアキは全力で学校への道を走っていった。

文月学園、それが俺とアキが通う学校の名前だ。

「何とか間に合ったな」

全力疾走し学園についた頃には、俺もアキも汗だくだった。

「そうだね、どこいけばいいんだろうね？」

見てみると周りに制服を着ている人間はいない。

「入学式だからまずは体育館じゃないか？」

「そっか、じゃあ体育館に向かおうか」

「おい、お前等」

体育館に向かおうかとした時に声を掛けられる。

声がした方を向くと浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマンですと言えるような男が立っていた。

スーツを着ているところから教師なのだろう。

「おはようございます」

「あっ、おはようございます」

頭を下げて挨拶するとアキも俺に釣られて挨拶をする。

「おはよう、新一年は体育館で入学式だ、さっさと行かないと始まってしまう……ぞ？」

俺の後ろに立っているアキをみてその人は固まった、さすがに入学式にセーラー服を着た男子を見るのは初めてなようだ。

まあ、当たり前だろうが。

「はい、わかりました、ありがとうございます」

とりあえず固まってしまったその先生にそう言って、アキを伴って体育館に向かった。

入学式が終わり、今年一年過ごすクラスに移動した。

俺もアキも同じＤクラスだった。

「これで連続１０年目だな、同じクラスなのは」

「そうだね、クラス替えとか結構あったのにずっと同じだよね」

自分の席に着き、前の席のアキとそう話す。

「はい、それでは自己紹介をお願いします、窓際の人から黒板の方に来て自己紹介してください」

担任の先生がそう言って自己紹介が始まった。

当たり障りのない自己紹介が続き、気の強そうな目とポニーテールが印象的な女子が、前に出て黒板に名前を書き自己紹介をする。

「シマダミナミでス。よろシくお願いしマす」

日本人の見た目でその子は片言だった。

それを聞いて他の生徒が目を丸くする。

帰国子女ってところか。

じゃあ黒板に書かれている島田美彼っていうのも波のほうだな、たぶん。

日本語に慣れてないみたいだな。

字は指摘した方がいいんだろうか？

「島田さんはドイツからの帰国子女だそうです。日本にはつい最近帰国したばかりなので、皆さん色々と助けてあげてください」

皆が目を丸くしているのを見て、担任の先生がそう言った。

ドイツか、ドイツ語ならなんとかなるな。

とりあえず字について指摘しておくか。

『字が間違っていますよ、島田さん』

日本語じゃない言語をいきなり話され、またもクラスがざわついた。

『えっ？』

『最後の漢字が違っているので直した方がいいですよ』

そう言われてメモみたいな物を取り出して確認する、島田さんは字の間違いに気づき、慌てて直した。

『ありがとう』

『いえ、困った時はお互い様という事で』

最後に島田さんは「よろシくお願いしマす」と言って席に戻っていった。

そして次の人の自己紹介、次は荒っぽい雰囲気を持ったガタイの良い男子だった。

「神無月中学出身、坂本雄二だ」

そう短い自己紹介をして席に戻っていく。

坂本って聞いたことあるな。

どこで聞いたんだっけと思い出そうとして、他の男子の会話が耳に入る。

「アイツ、例の神無月中の……」

「悪鬼羅刹て噂の……」

「かなりヤるヤツらしいぞ……」

ああ、そうか、神無月中の悪鬼羅刹、かなり喧嘩が強いって噂の奴か。

一対十でも余裕で勝つとか、一人で暴走族潰したって噂の。

まあ、噂は噂だし、本当の所はわからないが。

「木下秀吉じゃ。よろしく頼む」

そう自己紹介をしたのは男子の制服来た女子だった。

いや、男子の制服だから男子なのか？

一見すると女子にしか見えんな。

あとなんで爺喋り？

その性別がよくわからない人の次は、大人しそうな男子だった。

「……土屋康太。趣味は、盗さ、ーー何もない。特技は、盗ちょーー特にない」

呟くようにゆっくりとそういうが、絶対に盗撮と盗聴って言おうとしたよな？

なんかポケットから、デジタルカメラとボイスレコーダーという、今言ってたことが本当だと言える電子機器が顔を覗かせているし。

このクラスは大丈夫なんだろうか、色々な意味で。

次はアキの番だ。

「長月中学出身の吉井明久です。よろしくお願いします」

当たり障りのない普通の自己紹介、だけど上だけセーラー服っていうのが色々と台無しにしている。

「なんでセーラー服？」

「変態か？」

「意外と似合ってるかも……」

なんか色々と言われている、あと最後に言った女子は大丈夫か？

そして次は俺の番。

「同じく長月中学出身の如月眞也です。よろしくお願いします」

無難にそう自己紹介して、席に戻った。

その後の自己紹介は普通の何のインパクトもない自己紹介だった。

「はい、それでは今日は入学式とＨＲでお終いですので帰って結構ですよ」

そう担任の先生が言って教室から出て行く。

「今日はどうするの眞也？」

アキがそう話しかけてきた。

「そうだな、本屋にでも行こうと思っているんだが、アキはどうす

るんだ？」

「家に帰ってやりかけのゲームでもやろうかなと」

「そっか……あ、そうだ、食材買って帰るから夜は俺かアキの家で入学祝に豪華にいかないか？」

二人だけだから少し寂しいが、そういうのもいいだろう。

「いいね、じゃあウチでやらない？」

「わかった、じゃあ六時ぐらいにアキの家に行くよ」

「一人で大丈夫？」

「大丈夫だよ、歩いてる時なら滅多に症状でないし」

座ってる時が一番危ない。

「うん、わかった……パエリアの材料買ってきてね」

パエリアはアキの好物だ。

「わかってるよ、じゃあ先に帰っててくれ……アキ、お菓子を貰っても知らない人にはついていくなよ、それと迷子になったら携帯電話……は電池切れだったな公衆電話でかけてくるんだ、あと道に落ちてるものを拾い食いするな、他には「黙りナサい、ブタどモ」……今の何だ？」

いきなりの言葉にそう問いかける。

声がした方を向くと、島田さんが立ち去っていくクラスメイトに何か叫んでいた。

『待って、私の話を聞いて』

「なんか色々凄いね……眞也行ってみようか」

「ああ、そうだな」

アキに言われなくても行くつもりだったし。

島田さんに近づくと、俺に気づいて凄い勢いで迫ってきた。

『私の言葉を訳してもらえませんか？』

いきなりそう言われる。

『別にいいですけど……周りにもう誰もいないですよ』

ドイツ語でそう答える、間違った日本語でも使ったみたいだな。

さっきまで群がっていた人達は逃げるように立ち去っている。

島田さんは俺の言葉で辺りを見ると、人がいない事に気づいて溜息をもらした。

「島田さんだっけ、眞也？」

「ああ、それで合ってると思うぞ」

「えっと島田さん」

「ハイ？」

期待したように声を掛けられた方に振り向くが、アキを見てがっかりとした顔をした。

まあ、セーラー服姿だからな、気持ちはわかる。

アキじゃなかったら、俺も同じ反応だろう、表には出さないが。

『大丈夫ですよ、この人はいい人ですから』

そう言ってフォローしておく。

『そうなの？』

『はい』

『じゃあ、なんであの人の服はセーラー服なの？』

どうしよう、詳しい理由は俺も知らない。

「アキ、何でセーラー服なんだって聞いてるんだが……」

「え、この格好？この格好は、その……今朝寝坊して慌てていたから……」

間違いじゃない、間違いじゃないけど、絶対理解できないだろう。

島田さんを見てみるとアキの言った事を一生懸命理解しようとしている。

『深く考えない方がいいですよ』

長い付き合いである俺にもわからないんだから、普通の人は絶対に無理だ。

『ハァ』

『そうだ、よかったら一緒に帰りませんか？』

なんか日本語も上手く話せないみたいだし、まだこっちに来たばかりだろうから、この辺の事も知らないだろう。

ちょうど買い物に行こうとしてた所だし、一緒にどうかと思ってそう言った。

『ハイ？』

『買い物に行くんですが、良かったら途中までどうですか？』

『いいの？』

『ええ』

『それじゃあ、お願い』

「アキ、島田さんと一緒に帰る事になったけど、アキも行くか？」

「うーん、いややっぱり真っ直ぐ帰るよ、じゃあ、先に帰ってるね？」

「ああ、後でな」

「うん……あ、ごめん」

教室を出て行く途中、アキがクラスの男子にぶつかって謝った。

「痛ぇな、誰だ？」

「あ、坂本君、ごめん」

ぶつかった相手は悪鬼羅刹と呼ばれていた坂本雄二だった。

「ちっ、気をつけろバカ野郎」

「む、いきなりバカ呼ばわりは酷いじゃないか」

「あぁ？その格好と言動で何言ってやがる」

悪い、アキ、この発言は俺も賛成だわ。

「何だと、人を見た目と中身だけで判断するなっ！」

「それ以上の判断要素はいらねぇだろう！？」

それにも賛成。

『さて行きましょうか？』

とりあえずヒートアップしているアキはほっといて行くことにする。

『あれはいいの？』

『大丈夫ですよ』

思ったより坂本も悪い人じゃなさそうだし。

「アキ、じゃあ俺は行くから後でな」

聞こえてないだろうが、そうアキに声を掛けて、島田さんを伴って教室を出る。

帰るときの注意は大体さっきしたし、大丈夫だろう。

「それはこっちの台詞だ！いきなり初対面の相手をバカ呼ばわりしてくるなんて、この礼儀知らず！」

「入学式にセーラー服を着てくる男に礼儀を云々なんて言われる筋合いはねぇぞ！」

最後に聞こえてきたのはそんな声だった。

アキ……アキが礼儀云々は言えないだろうよ。

『……でここが図書館です、なんか読みたいものがあったら借りるといいですよ』

『うん、わかった』

現在は島田さんに町を案内中、やっぱりまだこの辺りの事は知らなかったらしい。

『ねえ、ちょっと聞きたいんだけど……どうやってドイツ語を覚えたの？』

突然そう問いかけられた。

普通に他の国の言葉を喋っている俺を不思議がっているらしい。

まあ、当たり前だろうな、実戦的すぎるし。

『ドイツ語だけじゃなくフランス語も話せますよ、父親がドイツが好きで、母親がフランスが好きで覚えさせられました』

ちなみに英語もできる。

両親とアキと何回かフランスとドイツに行ったこともあるから、たぶん話せるんだがな。

旅行中にアキと迷子になって自力で戻る為に、駆使したのがたぶん良かったんだろうな……あれは大変だった。

アキが行動的すぎてついて行ったら、気づけば見知らぬ場所、なんとか道を聞いて宿泊先のホテルに戻ってこれた。

本当にあの時は大変だった。

『ふーん……そうなんだ、だったらどうやったら日本語がはやく上達すると思う？』

『うーん、日本の映画とか見たらどうですか？言葉の速さに慣れれば何とかなると思いますよ？』

英語もドイツ語もフランス語も最初は聞き取りにくかったけど、慣れたら聞くだけなら何とかなったし。

『……映画か……レンタルビデオ屋ってどこにあるの？』

『あっちにありますよ、行ってみましょうか』

『うん、お願い』

そう言われたので今度はレンタルビデオ屋へ案内する事になった。

『今日はありがとう』

『朝も言いましたが困った時はお互いさまということですよ、また何か困った事があったら手伝えるなら手伝います』

現在の時刻は夕方の五時ぐらい、案内してたらこんな時間になっていた。

島田さんの手には借りたビデオやＤＶＤなどが入った袋、俺は本屋で買った本や夕飯の材料を持っている。

『……なんで如月はそんなに親切にしてくれるの？』

いきなりそんな事を言って来た。

『困っている人がいたら助けるのが普通でしょう？』

俺もアキも困っている人がいたらいつも手伝ってたし、普通の感覚だ。

『ふーん、そっか、じゃあ、私、こっちだから』

『はい、じゃあ、また明日』

「サヨウナラ」

「さようなら」

最後に日本語でそう言ってきたので、日本語でそう返す。

さて俺も帰るかと帰ろうとした時、強烈な眠気が襲ってきた。

瞼が閉じそうになるのを我慢するが、どうにもできない。

まずい、油断してた、アキに電話しないと。

急いで携帯をポケットから取り出し、アキに電話しようとするがその前に俺の意識は途切れた。

第二問

なんでこんなことになっちまったのか。

背負っている黒髪の男を見て、そう思う。

背負っている奴は確か如月眞也とか言ってた奴だ。

俺の後ろには如月の鞄と荷物を持った、帰国子女の島田が着いてきている。

偶然通りかかった道で倒れていた、というか寝ていた。

どうやっても起きないし、ほっとくのもあれなので財布に入っていた生徒証から住所を確認しこいつの家に向かっている最中だ。

傍でどうしていいか、わからなさそうにしていた島田に、こいつの荷物を持ってもらった。

今日は絶対厄日だ、入学式だからと言っておふくろが夕食は豪華にと言っていたが、今朝台所にあったのはザリガニだった。

色々と言ったがたぶんまだ伊勢海老と勘違いして、今日の夕食の食卓に上がるだろう。

休み時間中には翔子が色々としつこかったし。

帰りには突っかかってきた馬鹿、吉井明久とかいったか？

何をトチ狂ったのか知らんが入学式にセーラー服着てくるような馬鹿と喧嘩する破目になった。

そして最後にこの如月眞也とかいう男のことだ。

普通に考えて今日は厄日だろう。

「おっとここか？」

如月の生徒証をみて、ついたのはマンションだった。

「部屋番号は……」

さっさと帰りたい、早くこいつを親に引渡さねえと。

部屋番号をみて、その場所に着き、チャイムを鳴らす。

「ちっ、留守か？」

何回鳴らしても、誰も出ない。

しょうがない、自分の家の鍵ぐらいどっかに持ってるだろう、とそう思い財布の中を調べる。

調べている途中、隣の部屋が開いた。

「眞也は今留守ですよ……貴様、坂本雄二、眞也に何してる？」

聞こえてきたのは、聞き覚えのある声、その方向を向くと吉井明久がいた。

「ああっ？なんでお前がここにいやがる？」

「そんな事より眞也を離せ」

そう言って馬鹿が突っ込んできた。

「うおっ、いきなり何しやがる、この馬鹿野郎！」

「また馬鹿呼ばわりしたな、この礼儀知らず！」

「だからてめぇに礼儀知らずなんて言われる筋合いは……ねぇ！」

再度殴って来ようとする馬鹿に殴りかかる。

「っ！？、この！」

「ちょうどいい、教室での決着つけてやる！」

「それは僕の……台詞だ！」

この馬鹿、ぶちのめす。

どうすればいいんだろう。

目の前で殴り合っている、ヨシイとサカモト……だっけ？をみて私はそう思った。

言葉もわからず自己紹介のインパクトもあって色々と不安があったが、ドイツ語を話せる人が居て、不安は薄れていった。

何人かが質問してきた時は失敗して、まずいことも言ってしまったが、一人で寂しい学校生活を送る事だけは避けられそうだ。

町も案内してもらったし、とりあえず順調なスタートかなと思った。

だけど今はこんな状況。

気絶したキサラギを歩いてきたサカモトが、仕方なさそうに背覆い、私に身振り手振りでキサラギの鞄と荷物を持てと言って来た。

慣れた手つきで生徒証からキサラギの家を見つけ、着いたら学校でセーラー服を着ていたヨシイが隣の部屋から出てきた。

勢いよく喋っていたので何を話しているかわからなかったが、そのまま二人は殴り合いを始めて今に到る。

私は一体どうしたらいいんだろうか？

この状態で気絶しているキサラギを放って帰ることもできないし、二人の喧嘩を止めるのも難しそうだ。

とりあえず気絶しているキサラギを揺さぶってみる。

「キサラギ！」

揺さぶりながら名前を呼んでも起きない。
顔色は悪くないし、気絶というより寝ているだけみたい……よく見たら結構綺麗な顔してるかも。
よく見ようとそのまま、顔を少し近づけ。
次の瞬間後ろから思いっきり押された。
目の前にはキサラギの顔。
覗き込んでたのが仇になった、そのままぶつかって唇と唇が触れ合ってしまう。
『！？』
「っ、ごめん島田さん……貴様ぶっ飛ばす！」
ヨシイに後ろからそう声を掛けられる。
どうやらヨシイに押されたようだ。
ってそうじゃなくて。
ファーストキスがこんな形でだなんて……。
後ろを向くと殴り合っている二人の男子。
それを見て私は思いつく。

そのまま思いついたことを実行しようと、二人の方に走っていき…
…思いっきりその二人に飛び蹴りを喰らわした。

『私のファーストキスを返せ！』

「ぐはっ」

「へぶっ」

そう言ってヨシイとサカモトが吹っ飛んでいく。

この程度では終わらせない。

私は更に吹っ飛んだ二人に走っていく。

「待って！何で島田さんが攻撃してくるの！？がっ」

「知るか！って、待て島田、ぐふぉ」

そのまま、まずヨシイの膝に脚を乗っけて、反対の脚の膝を顔に目掛けて振りぬき、その勢いのままサカモトに踵落としをする。

『私のファーストキス！』

「何言ってるかわからないよ！」

「俺もだ、とりあえず逃げるぞ！」

二人は逃げようとするが絶対に逃がさない！

目が覚めたらアキと坂本が、島田さんに追いかけられていた。
何を言っているのかわからないと思うが俺もわからない。
とりあえず辺りを確認する。
見覚えのある場所だと思ったら、住んでるマンションの廊下だった。
たしか帰ろうとした時にいつもの発作が現れて、寝てしまったんだよな、なんでそれで目覚めたら帰ってきてるんだろう？

『逃げるな！』

「ちょ、待って、島田さん！くそっ、これも貴様の所為だな！」

「ちげえ！それだったら俺はとっくにお前を潰してるわ！」

島田さんの蹴りを避けながら、怒鳴りあっているアキと坂本。何気に余裕があるみたいだ。

さて、どうしようか？

近くに鞄と荷物を発見する。

とりあえず、荷物を家に置いてくるか。

鍵を取り出して、ドアを開けて家の中に入っていく。

さて、何があったのか。

食材を冷蔵庫の中に入れながら、考える。

今日の帰りにアキと坂本が喧嘩してたが……そのまま意気投合した？

アキなら大体の人間と仲良くできるからありそうだが。

それでなんで島田さんに追いかけられてるんだろうか？

アキが何も考えずに島田さんに失礼な事でも言ったんだろうか？

ありそうだ。

荷物を仕舞い、戻ってみるとまだやっていた。

『喰らえ！』

「ごふぁ」

「げふっ」

島田さんの蹴りがいい角度で二人に入っていた。

そのまま倒れこむ二人。

『どうしてくれんのよ！』

そう言って少し涙目になりながらアキと坂本を揺さぶる島田さん。

一体何をやったんだろう？

「酔う、酔うから！」

「うおっ、壁に当たってる！痛ぇって、頭に当たってるからやめろ、島田！」

揺さぶられて酔いそうになっているアキと、揺さぶられている事でガンガンと頭を後ろの壁に打ち付けている坂本。

地味に痛そうだ。

「えっと、何があったんだ？」

『えっ？』

「眞也！お願いだから助けて！」

「こいつを何とかしろ！」

驚いた表情になる島田さんに、助けを求めるアキ、頭をガンガンと打ち付けられながら必死に言ってくる坂本。

『何があったんですか島田さん？』

『えっ、あっ、うっ』

そう言って問いかけるが意味不明な言葉を発する島田さん。
そして思いっきり駆け出して行った。
「なんなんだ？」
後ろ姿を見ながらそう呟く。
「眞也、ありがとう」
「すまん、助かった」
そう言って立ち上がる、アキと坂本。
「とりあえず何があったんだ？」
「わかんないよ、いきなり島田さんが攻撃をしてきて……」
「ああ、死ぬかと思ったな」
説明になってないがようはわからないってことか。
「ふむ、それでなんで坂本がここにいるんだ？」
「お前が道で倒れてたから、連れて来てやったんだ」
「そうか、それはすまん、ありがとう、とりあえず怪我してるみたいだし、お詫びに怪我の治療と家で夕飯でも食ってくか？」

そうか、坂本が家まで連れてきてくれたのか、やっぱいい奴っぽいな。

「！？いいのか？」

ものすごく嬉しそうにそう言ってくる。

たかが夕飯なのに。

「ちょ、眞也！？」

「ん？」

「そいつは眞也の財布の中弄くってたんだよ？」

「そうなのか？」

とりあえず坂本に聞いてみる、アキの誤解ってこともありそうだし。

坂本はそういうことする奴に見えないし。

「チャイム鳴らしても誰もいなかったから、こいつの家の鍵探してただけだ」

「だそうだ」

「くっ、そんな見え透いた嘘を！」

「アキ、いいから、やめとけ、嘘じゃないと思うし」

「むぅ、わかったよ」

俺に言われアキはそう言って怒りを納める。

「とりあえず家の中に入ろう、アキの家に食材持ってくから、坂本はアキの家で待っててくれ」

「わかった、貴様、変な事するなよ」

「するか！とりあえず上がらせて貰う」

そう言ってアキと坂本はアキの家に入っていく。

とりあえず必要な食材だけアキの家に持っていくか。

「おっと、島田さんが置いていったみたいだな、明日渡すか」

落ちていた島田さんの物と思わしき鞄とビデオなどが入った袋を持って家に入った。

「おふくろか？友人の家で飯食って帰るから、夕飯はいらねぇ」

アキの家に入ると坂本が電話をしていた。

家に掛けているみたいだな。

「ふぅ、これで食中毒だけは免れたか」

電話を切って心底ほっとしたようにそう言って息を吐いている。
「食中毒ってなんだ？」
「ん、ああ、聞くな」
哀愁を漂わせながら、そう言ってくる。
これ以上聞いたら拙そうだ。
「とりあえず座っててくれ、俺とアキは夕飯の仕度するから」
「手伝うぞ？」
「いいよ、お客だしな」
「そうか、じゃあ料理する前に救急箱を貸してくれ」
「あいよ」
そう言ってアキの家の救急箱を渡す。
アキの家のどこに何があるかなんて知り尽くしている。
「わりぃ」
「とりあえずここに飲み物置いておくから、座っててくれ」
「ああ、わかった」

返事を聞いて、台所に向かい支度しているアキと料理を作り始めた。

「随分と豪華だな」

目の前の料理を見て坂本がそう言ってきた。

「入学祝に豪華にしようって決めててな、二人じゃちょっと寂しいし坂本がきて丁度良かったよ」

「そうなのか、そういえば両親はどうしたんだ？」

「俺もアキも親は海外で仕事、だから一人暮らしだよ」

「ふむ、そうか」

「ああ、とりあえず冷める前に食べよう」

「うん、じゃあ、食べようか」

「「「いただきます」」」

そう言って夕飯を食べ始めた。

「そういえば坂本の家はどうなんだ？」

「ん、なにがだ？」

「両親は何やってるんだ？」

「親父は会社員、おふくろは専業主婦？だ」

「ねえ、雄二、なんで疑問系になってるの？」

いつの間にかアキが坂本の事を名前で呼んでる。

何があったんだ？

「気にするな」

「えっ、なんでそんな苦い顔してんの？」

親の事は聞かれたくないらしいな。

「それより、なんでお前は道端で寝てたんだ？」

やっぱ聞いてくるよな。

道端で寝てたんだし。

まあ、隠してないからいいけど

「坂本はナルコレプシーって知ってるか？」

「確か眠り病とか言われてる病気だったよな？」

知名度低いから知らないかと思ったら少しは知ってるみたいだな。

「ああ、そうだ、俺はそれに掛かってて、日中に突然強い眠気が襲ってきたり、睡眠の時に現実感の強い幻覚見たり、金縛りにあったりするんだ」

他にも情動脱力発作という、感情が高ぶった際に力が抜けて倒れるような発作もあるが、幸い俺はその症状には掛かっていない。

「ほー、それは大変だな」

「そうでもないさ、慣れてるからな」

「そうか、って明久それ俺のだろう！」

「油断したほうが悪い！」

「ちっ、だったら……」

「雄二、よくも僕のから揚げを！」

「先に俺の餃子取ったのはお前だろうが！」

「今日一日で仲良くなったな？」

まあ、アキだしな。

「「どこがだ！」」

そう言って、はもってるんだし、仲良いと思うぞ？

こうして俺の高校生活一日目は愉快に過ぎて行った。

これから楽しくなりそうだ。

第三問

入学式から一週間が経った。

『えっと、島田さん？』

四時間目の授業が終わった後の昼休みに俺は島田さんに声を掛けた。

『！？え、な、何？』

『いや、良かったら俺等と飯食わないかなって？』

初日に間違った日本語を使ったからか、大体一人で昼飯食っていると思われる島田さんにそう声を掛ける。

あの日の放課後の島田さんの言動は、次の日クラスの人間にフォローして誤解は解いた。

解いたがやはりあの時の印象が拙かったことと、日本語が片言しか喋れないことが拙いらしい。

見ていると休み時間でも一人でいる。

『あ、あの、その、ごめんなさい！』

顔を赤くしながらそう言って、教室を飛び出す島田さん。

入学式の次の日からずっとこんな感じだ。

何もやってないよな俺？
胸に手を当てて考えても逃げられる事はしてないと思うんだが。
やはり寝てた時に何かあったんだろうか？
「む、また、逃げられたようじゃな？」
「心当たりはないんだけどな」
最近になって共に昼飯を食うようになった友人であるヒデ、木下秀吉に向かってそう答える。
「なんで逃げるのかは聞いたのか？」
「聞く前に逃げられるからなー」
次は少々強引に行ってみるか？
このままじゃ、あれだしな。
「ふむ、それは大変だのう」
「ああ、まあ、それより飯にするか」
そう言ってアキやユウの所に向かった。

「康太、ワシの卵焼きとその煮物交換せんか？」

「……いい」

そう言って頷きコウ、土屋康太が交換に応じる。

無口だが良い奴だ。

ポケットに入っている盗撮、盗聴装置を除けばだが。

「おい、明久、その生姜焼き、俺のと交換しねえか？」

「ん、いいよ……ってキャベツ一切れは無いだろ馬鹿雄二！」

アキの生姜焼きを持っていった分、キャベツ一切れをアキの弁当箱に入れるユウにそう怒鳴るアキ。

「ん、ああ、すまん」

「分かれば良いけどさ」

「じゃあ、これも貰うな」

そう言ってアキの卵焼きも掻っ攫っていく。

「雄二の中ではキャベツ一切れにどんだけの価値があるの？！明らかに僕の方が少ないじゃないか！」

そう言いながらアキはユウの弁当箱に入っている唐揚げを持っていく。

「明久、それはないだろ！」
「油断した方が悪いのさ！」
「てめえ！」
そして始まるガンのくれ合いからの喧嘩。
「またか、ヒデ、コウ、ちょっと非難するか」
「そうじゃのう」
「……わかった」
そういって慣れたように机を二人から離す。
「毎回飽きんのう」
「……（コクコク）」
呆れたようにヒデが言って、コウが無言で頷く。
「確かに、まあ、いいんじゃないか？」
喧嘩するほど仲が良いとも言うし。
実際悪友のような間柄だしな。
「まあ、見てる分には飽きんのじゃがな……そういえば話は変わる

が二人は部活には入らんのか？」

「部活か、ヒデは演劇部だっけ？」

「うむ、中学の頃も入っていたのでな」

「そうなのか、俺は料理部と手芸部で掛け持ちしてたな」

両方男女比が２：４７とかいう男女比だったな、確か。

男女比がこれでもそこまで苦痛は無かったし、みんな仲良かったので楽しかったが。

アキと二人で女装させられたのはいい思い出だと思う。

女装癖はないけどな。

「コウは何か入っていたのか？」

「……入ってなかった」

そう言って首を振りながら答えるコウ。

「二人ともどこか入らんのか？」

「……（ぶんぶん）」

「どっか……ねえ」

コウは無言で首を振り、俺はそう言って少し考える。

入るのなら、手芸部か料理部か、でも演劇も楽しそうかもしれないな、中学でも少し手伝ったし。

高校ではアキはどこも入らないで家でゲームするって言っていたが……どうしようか。

一週間しか経ってないし、とりあえず保留にしとくか。

「俺も今の所は保留にしとくかな、まだ始まったばっかだし」

「そうか」

「ああ……おっと休み時間終了か」

「そうみたいじゃな、明久と雄二は……今日は相打ちみたいじゃな」

二人の方向を見て、ヒデがそう言う。

二人とも倒れて目を回していた。

「とりあえずいつも通り椅子に座らせておくか」

ＨＲが終わり俺はすぐに島田さんの席に行った。

『島田さん？』

『はうっ！？え、ええええっと、ななななに？』

慌てながらそう尋ね返してくる。

慌てすぎじゃね？

『あ～と、入学式の日俺が寝ている間に何があったか教えてくれないか？』

そう言うと島田さんは少し黙って思い出すそぶりをし

『……（ボンッ）』

と頭から湯気を出した。

そして真っ赤な顔で目を回す島田さん。

いや、本当に何があった。

目の前で顔を赤くしながら気絶した島田さんを見ながら俺はどうしようかと思案した。

「じゃあ、僕は先に帰ってるね」

「おう、わかった、拾い食いはしないようにな」

「あははは、大丈夫だよ」

そう言ってアキが教室から出て行く。

アキは家でゲーム。

ユウはゲーセン。

ヒデは演劇部。

コウは不明。

といった具合。

俺は島田さんが起きるまで教室で小説を読む事にした。

このまま、放って置くのもあれだし。

俺は小説のページを捲り読み進む……そしていつの間にか寝ていた。

目が覚めたら夕方だった。

目を擦りながら私は周りを確認する。

窓から夕陽が差し込んでいる教室の中、私以外にもう一人いた。

如月眞也、入学式の日に唯一友達になった人だ。

机に突っ伏して寝ている。

あの事を思い出して気絶しちゃったんだっけ。

なんでこんな時間まで教室にいるか思い当たって私は納得した。

入学式の帰りの事を思い出して、また顔が熱くなる。

あれからずっとこうだ。

唯一の友達なのに恥ずかしくて話すことができない。

顔を見るとあの時の事を思い出してしまう。

事故だからといって割り切ることなんかできなかった。

そのまま私は椅子から立ち上がり、寝ている如月に近づく。

「すー、すー」

幸せそうに寝ている。

その顔を見ながらなんでこんな優しいのだろうと思う。

理由も知らない彼から見れば、私の行動は最悪だろう。

逃げ回っているのだから、普通なら愛想が尽きて話しかける事なんてしないと思う。

だけど彼は授業中もフォローしてくれているし、変わらずに話しかけてくれる。

本当に優しい。

どうすれば良いかは分かっている。

でも、あと一週間はないと気持ちに整理が付けられない。

あと一週間経っても変わらずに話しかけてくれると嬉しいなと、そんな都合の良いことを思いながら私は彼の寝顔を見ていた。

第四問

「今日の一時間目はＬＨＲだ、清涼祭の出し物を決めるからな、それじゃこれで朝のＨＲを終了する」

担任の西村先生が朝のＨＲでそう言って教室から出て行った。

「眞也」

そう言ってアキが話しかけてくる。

「清涼祭って学園祭でいいんだよね？」

「たぶんな」

「何やると思う？」

「さあな、お化け屋敷か喫茶店が定番だし、それらじゃないか？」

「何の話をしているんじゃ？」

アキと清涼祭の事を話しているとヒデとコウが近づいてきた。

「あ、秀吉にムッツリーニ、清涼祭に何やるのかなって話してたんだけど、二人は何をやりたいと思う？」

「む、そうじゃな……演劇なんてどうじゃ？」

「演劇は準備期間足りないと思うぞ？」

「……（コクコク）」

俺の言葉にコウも頷いて同意する。

「それもそうじゃな」

『何の話してるの？』

『清涼祭の話だけど、島田さんは何やりたい？あとドイツ語になってるぞ？』

少し前に普通に戻って、仲直りというか改めて友達になろうと言われ、改めて友人になった島田さんが話しかけてくる。

まだ偶に顔を赤くするが、なんでだろうか？

「アット、アリガトウ、ソウね…日本デハ何ガ、定番ナの？」

「大体、喫茶店とかお化け屋敷だな」

「オバケヤシキ？」

「ホラーハウスって言えばわかるか？」

「お前等、集まって何話してんだ？」

島田さんにお化け屋敷の説明をしていると、ユウが話しかけてきた。

これでクラスでの主な友人が揃う。

「清涼祭に何やりたいかって話してたんだけど、雄二は何やりたい？」

「その話か、俺はそこまで興味ないからな、たぶん喫茶店か何かだと思うが」

そう言って興味無さ気な表情になる。

「そっか、ムッツリーニは何やりたい？」

「……写真館」

「「「「いや、それは拙いだろ（じゃろ）」」」」

俺とアキとユウ、ヒデが一斉に突っ込みを入れる。

理由はコウが盗撮、盗聴の類をしていて、確実にそういう写真が出るだろうと全員が思っているかだ。

まず、間違いなく営業中止になる。

というか下手したら停学になるんじゃないか？

「……」

俺達の答えを聞き、コウは残念そうな表情をした。

「島田さんは？」

「ウチ？ん～喫茶店デイイト思ウケド」
「まあ、俺もそれでいいと思うけどな」
何やっても大変なのは変わらないと思うし、楽しめればいいしな。
「よし、明久、清涼祭で何やるか賭けないか？」
「いいよ、何を賭けるの？」
「何か一つ言うことを聞くってどうだ？」
「乗った、じゃあ僕はお『俺はおばけ屋敷で』って雄二！」
「なんだ、明久？」
「僕がおばけ屋敷って言おうとしたのに」
「そうか、じゃあ、喫茶店にしてやろう、ありがたく思えよ」
「うん、ありがと……って何で僕が雄二にお礼を言わなきゃいけないのさ」
「譲ってやったんだから当然だろう」
と言い争いに発展していく二人。
「本当に仲が良いのう」
「そうだな」

「……（コクコク）」

「ホットイテ良イノ？」

「大丈夫だろう、二人の挨拶みたいなものだしな」

そんな事を話しながら俺達は二人の言い争いを見ていた。

「結局喫茶店か」

清涼祭での出し物は喫茶店に決まった。

ということで賭けはユウの勝ち。

ちなみに喫茶店の内容はメイド喫茶。

女子がメイドの格好で接客するあれである。

「ウチハアレ反則ダト思ウンダケド……」

「学園祭実行委員が雄二じゃからのう、壇上でいかに喫茶店が良いか、あそこまで熱弁を言わせたらそうなるじゃろう」

ヒデが言った通りユウはわざわざ学園祭実行委員になって、他のクラスメートを説伏せて喫茶店にしたのだ。

そこまでして勝ちたかったんだろうか？

まあ、売り上げ一位のクラスは片付け免除っていうのもあるから、それが目的だったのかな？

「しかし何をさせるんじゃろうな？」

「……わからない」

近くに座っている皆で小声で話している間にもユウが壇上で色々と決めていく。

「さて、じゃあ次だが皆まずこの写真を見て欲しい」

そう言って一枚の写真を取り出す。

あれって、もしかしてこの前家に来た時に貸したやつか？

「雄二！その写真どこから！」

そう言ってアキが立ち上がりユウに向かってそう叫ぶ。

アキがこうなるのも無理はない。

その写真に写るのは女装姿のアキなのだから。

格好は長い髪に黒いリボンを結んだセーラー服姿である。

ちなみに中学の部活の女子からはアキちゃんと呼ばれ可愛がられていた。

「さてここに写っている、奴だが……どう思う？」

そうユウが聞くと。

『可愛いんじゃない？』

『坂本君の彼女？』

『紹介しろや！』

などと皆言っている。

「ふむ、好評のようだな……この写真に写っているのは吉井明久だ！」

そうユウが言うと同時に男子は少し固まり、女子は何故か嬉しそうにどよめく。

「ここで皆に聞きたい、男子は厨房で料理の予定だが、吉井明久にはメイド服を着て女装してもらうのはどうだろうか？皆が言っていた通りこの格好なら女子で通る！」

そう言って力説するユウ。

これか、この為にわざわざ実行委員になったのか？

「のう、眞也、もしかしてさっきの賭けはこれをやらせるためにやったんじゃろうか？」

「たぶんな、しかも最初は文化祭に気のない振りをして気づかせないようにと無駄な前振りもしてな」

「眞也はいいのか？このままじゃ明久が女装するはめになるんじゃが……」

「まあ、そこまで害はないし、せっかくの文化祭だからハメを外すのもいいんじゃないか、問題はないだろう、アキも女装には慣れてるしな」

そう言って小声でヒデと話す。

話し合いではアキがさっきの賭けを持ち出され、ユウに言い包められていた。

「でだ、吉井明久だけ女装するというのも寂しいだろうからな、木下秀吉にもやってもらいたいんだがどうだ？」

「む、ワシかワシは別に構わんが」

演劇で女役をやった時の練習になるだろうと思っての答えなのだろう、ヒデはそう言って了承する。

「なら決まりだ、女子とこの二人は接客、他の男子は厨房だ、続いて衣装についてだが……」

そう言って衣装についてユウが話し始めた時、メイド喫茶と決まっ

た時から机の上で高速で何かを書いていたコウが手を上げる。
ちなみにアキは机に突っ伏して心の中で泣いているみたいだ。
後で何か奢ってやるか。
「なんだ康太？」
「……衣装に関してだがこれなんてどうだ」
そう言って立ち上がりユウに今まで書いていた紙を手渡す。
「ほぅ、なかなかいいな、だが学園祭まで時間がないが人数分作れるのか？」
「……一日あれば楽勝」
そう言ってサムズアップした。
間違いなく徹夜になると思うんだが、まあ出来ると言っているし大丈夫なのだろう。
「わかった、よし女子＋二名のメイド服だが、これでどうだろうか？」
そう言ってコウが持ってきた紙を前から回していく。
古風な感じの露出が少ないロングスカートのメイド服。
周りの話しを聞いているとなかなか好評みたいだ。

これで衣装も決まりかね。

「好評のようなので衣装もこれで決まりでいいな？次は店で出す品だが……」

とその後もさくさくと決まっていき、我がクラスでの出し物が正式に決まった。

「よう、眞也、借りてたアルバム返すな」

放課後そう言ってユウが渡してくる。

「もしかしてこれの為に借りたのか？」

「ああ、じゃなきゃ、他人のアルバムなんて使いようがないしな」

それもそうかと思いながら受け取ったアルバムを鞄の中にしまう。

「眞也、何で貸したのさ！」

そう言って多分一番の被害者であるアキがそう言って詰め寄ってくる。

「何でって言われてもな、ただ貸してって言われたから貸しただけ

だし」

「というかなんで眞也の家のアルバムに明久の写真があるんじゃ？」

「幼馴染だからな」

「そういう問題かのう」

そういう問題じゃないのか？

「コウは？」

「帰ったらさっそく衣装作りだと言ってさっき帰ったぞ、明日には女子＋二名分できてるんじゃないか？」

そっち関係の行動力は凄いなコウは。

盗撮は駄目だと思うが。

「さてじゃあ用もないし今日は……」

とそう言いかけて俺は意識を失った。

「いつものやつじゃな」

「そうみたいだな」

秀吉と雄二が机に突っ伏して突然寝てしまった眞也を見ながらそう言う。

今日は授業中起きてたから妥当かな。

とりあえず眞也の鞄を持って。

「雄二ちょっと手伝って……よいしょっと」

そう雄二に言って手伝ってもらって眞也を背中に乗せる。

最近は放課後とかなかったから久しぶりかな。

小学生の時はもうちょっと多かったと思うけど。

「じゃあ僕は帰るから、じゃあね、秀吉、雄二」

「うむ、気をつけて帰るんじゃぞ」

「落としたりしないようにな」

二人がそれぞれそう言ってくる。

「落とさないよ！じゃあ明日ね」

まったく幾らなんでも眞也を落とすような事はしないよ、鞄は落とすかもしれないけど。

そういえば今日の夕飯はどうしようかな、眞也がこの状態だから僕一人で作らなきゃいけないし。

昨日特売で材料は色々買ってあるから、選択肢は多いけどどうしようか。

……オムライスにでもしようかな、簡単だし。

そう思いながら廊下を歩いていると他の人が学園祭の話しをしているのが聞こえてくる。

学園祭か……まさかまた女装する事になるなんて思わなかったな。

まあ、賭けに負けたから仕方ないんだけど。

卑怯な手でも勝ちは勝ちだしね。

それにしても女装か……中学では眞也が入っていたから僕も一緒に料理部と手芸部に入っていたけど……女装はやりたくなかったね。

他の部員全員（全員女子）が上目遣いでお願いしてきたから、おもわず着ちゃったけど。

セーラー服、ナース服、巫女服とか色々とカツラ被らされて着させ

られたな。

眞也なんか途中から「もう楽しんだ方が精神衛生上よくないか」とか言ってノリノリでやってたけど。

そういう何にでも楽しめるのが眞也の良い所なんだけどね。

でも女装は何か間違っていると僕は思う。

第五問

清涼祭初日、僕等の教室は人で賑わっていた。

「吉井く……アキちゃん三番テーブルお願い！」

「はーい」

近くの女子に言われて僕は急いで三番テーブルに行く。

アキちゃんって呼ばれてるけど……まあしょうがないよね。

長いスカートだと少し動きにくいし、スースーするけど慣れてきた……慣れたくなかったけど。

接客の方は……うん、最初は噛んでたけど今はたぶん大丈夫。

三番テーブルにいたのはウチの学校の男子生徒二人、一人は眼鏡を掛けている。

よし、いくぞ。

「いらっちゃ……」

噛んだ。

「……可愛い」

「……可憐だ」

座っている男の客が小さく何か呟いたような気がするが気をとりなおそう。

なんか悪寒がしたけど気のせいだよね。

噛まないように噛まないように。

「いらっちゃ……いらっしゃいませ、ご注文をどうぞ」

噛んだけど無視でいいや、たぶん大丈夫。

さすがに何回も失敗するとどうでも良くなってくる、忙しいから落ち込む暇もないし。

眞也や雄二も厨房で頑張っているだろうしね。

「……ホットコーヒーとショートケーキを一つ」

「……レモンティーとショートケーキで」

「ごチュっ！……ご注文を繰り返しますホットコーヒーを一つにレモンティーを一つ、ショートケーキを二つ、以上でよろしち……よろしいですか？」

メモを読み返し注文を繰り返した時にまた噛んだけど、もういいや、どうにでもなるよ、きっと。

「はい」

「それでは少々お待ちください」

そう言って注文を厨房の方に届けに行った。

早く休憩時間にならないかな。

そういえば休憩時間は眞也達と被らなかったっけ、眞也がどっかで寝ないか心配だけど……島田さんに任せればいいか。

やっと休憩時間か。

客がひっきりなしに来るから結構疲れた。

休憩時間は島田さんと回る予定だ。

まだ日本語完璧じゃないし、少しは喋れても読むのは全然だからパンフレットも読めないので案内役は必要だ。

少しは喋れるんだし別に俺じゃなくてもいいと思うが、まだあれから三週間しか経っておらず割りと敬遠されているからだろうな。

まあ、俺も女子と回れるなら嬉しいからいいけど。

時間が重なったらアキと回ったんだろうがアキとは休憩時間ずれてるし。

少し心配だがユウもコウもヒデもいるし大丈夫だろう。

「オ待タセ！」

色々考えているとそう声を掛けられる。

見るとメイド服の島田さんが立っていた。

ウチのクラスでの方針で休憩時間でもメイド服着用で宣伝してこいってことらしい。

大変だなと思うが実に眼に楽しいので俺的には良しだ。

「おう、とりあえず昼飯でも食いに行くか」

「Ｊａ……ウン、イイワよ、ドコニ行クの？」

「そうだな……二年Ｂクラスがドネルケバブ作っているみたいだな、これでどうだ？」

パンフレットを見て、良さそうな物を選んでそう言う。

「イイわ、ジャア行こ？」

「ああ」

島田さんも了解してくれたので二年Ｂクラスに行くことになった。

二年Ｂクラスのドネルケバブは中々美味しかった。

今度家でも作ってみるかね。

「次ハドコ行クの？」

「島田さんはどっか行きたい所は？」

「ウチ？ウチは……ソウね、デザートデモ食べタイカナ」

「デザートか……」

パンフレットを確認、三年Ｃクラスでクレープ、二年Ａクラスでケーキを販売しているらしい。

「クレープとケーキどっちがいい？」

「ン～クレープで」

「じゃあ、三年のCクラスだな、行くか」

「ウン」

とりあえず行く所が決まったので歩く。

「あ、如月君」

歩いていると声を掛けられた。

見ると他校の女子達。

中学の時の同級生で同じ部活だった人達だ。

「沼川さんに吉野さんに黒井さんか、久しぶり……ってほどでもないか」

「まだ半年も経ってないしそうだね、吉井君は？」

大体いつも俺の隣にいるアキがいなくて吉野さんがそう言ってくる。

「アキならクラスでウェイトレスやってるよ」

「ウェイトレスって事は……もしかして女装姿ですか？」

眼鏡をクイっと持ち上げながら黒井さんが食いついてきた。

「当たり、メイド服にいつものようにカツラつけて化粧してるよ」

「クラスはどこなんです？」

「一年のＤクラスだ」
「そうですか、ぜひとも行きませんと」
そう言ってにやりと笑う。
少し怖い。
「如月君は女装しないの？」
「ああ、しないぞ」
「それは残念、目の保養になったのにな」
「はっはっは、やめてくれ」
さすがに積極的にはなれん。
そう話しているとクイっと服を引っ張られる。
見ると不機嫌な島田さん。
「悪い……沼川さん達悪いけどもういいか？」
島田さんに短く謝って沼川さんにそう言う。
さすがに拙かったかね。
「あ、ごめん、彼女？邪魔しちゃった？」

隣にいる島田さんを見ながら沼川さんがそう言ってくる。

「いや、彼女じゃないけどな、まあ、こういうわけだから行っていいか？」

「ええ、いいわよ、頑張ってね、如月君」

「何に対してかは聞かないけど、ありがとうよ、じゃ、また」

そう言って分かれる。

『さて、さっそくDクラスに行きましょう、菜月カメラは？』

『使い捨てがあるけど、失敗したね、まさかアキちゃんが見られるとは思わなかったから』

『問題ないよ、一年の教室は二階だったよね、行くよ！』

『『ええ！』』

後ろからそんな声が聞こえてくる。

アキ、頑張ってくれ、さすがにあれは止められない。

その後俺は島田さんに侘びとしてクレープ奢って機嫌を直してもらって、休憩時間は楽しんだ。

少しぐらい自惚れてもいいのかね。

眞也と島田さんや他の人が戻ってきて僕も休憩時間になった。

うん、それはいい。

休憩時間でもメイド服着用も……宣伝だから、まあ、いいけどね。

問題は。

「いや、可愛かったね、アキちゃん」

「噛んで恥ずかしさで顔を赤らめる所なんて凄く良かったわ」

「ちゃんと撮った、菜月？」

「もちろん！」

そう言って僕の周りいる中学の時の同級生だ。

「でさ、どこに行こうとしてるの？」

「ん？アキちゃんはお昼食べてないんでしょ？」

「うん、そうだけど」

「良いもの見せてもらったし、私達がお昼奢ってあげるわよ、ね、桜」

「ええ、それくらいは許容範囲内です、デザートもつけますよ」

「えーと、ありがとう」

素直にお礼を言っておこう。

一食分浮いたから、その分何か買おうっと。

「灯、みんなに連絡はついた？」

「うん、みんな、明日来るみたい」

「えーと、何の話？」

嫌な予感しかしない。

「え、明日はアキちゃんを知っている元手芸部全員が来るって話しだけど？」

「なんで！？」

元って確か４０人はいたよね！？

「そりゃ、みんなアキちゃんが見たいからに決まってるじゃない」

「当然そうに言うのはやめて！？」

「いやー、メール送ったら３０秒でみんなＹＥＳって返してきたよ～」

「何で！？みんなそんなに暇なの！？」

「え、暇なわけないじゃない、休日だよ？中には彼氏との約束無視して来るって、返してきた子もいるし」

「なんでさ！なんでそれでも来ようとするの！？」

「そりゃ、アキちゃんがいるなら、他の用事蹴ってでも来るに決まってるじゃない」

「決まってるんだ！？」

「そりゃ、アキちゃんだしね」

「アキちゃんですしね」

「アキちゃんだからね」

三人が口を揃えて言ってくる。

「もう僕には色々わからないよ！？」

なんでそうなるの！？僕が女装しただけでなんでそうなるの！？

「ま、そんなことはいいから、お昼食べよ」

「いや、良くないからね！？」

「来る事は決まっていますし、悩んでも仕方ありませんよ、アキちゃん」

「ほら、行くよ～！」

「ちょ、引っ張んないでってば！」

そう言うが聞いてもらえず、僕は三人に引っ張られていった。

「で、どうだった、アキちゃん？」

二年のEクラスから出て沼川さんがそう言ってきた。

「美味しかったよ、ご馳走様、ありがとう沼川さん、吉野さん、黒

井さん」

奢ってもらったんだから美味しくないわけない。

「いえいえ」

「デザートも結構美味しかったし、当たりだったね、それでアキちゃんはまだ休憩時間？」

「うん、まだ休憩時間だよ」

戻るにはまだ早いし、色々見て回ろうかな。

それにしてもかつらのせいか頭が少し重い。

外したいけど、外したら僕が男とばれるかもしれないので外せない。

変態扱いは嫌だしね。

「じゃあ、私達と行きましょうか」

「それはいいけど、どこに行くの？」

「クレープが売っている教室がありましたから、そこに行きましょう」

デザート食べたのにまた甘い物か、本当に女の子は甘い物が好きだよね。

三年Ｃクラスのクレープを食べに行く事が決まったので四階に行く

為に階段を上がることにする。
そして階段を上ろうとした時、悲鳴と同時に人が降ってきた。
「きゃああ！」
「うわっと」
驚きながらも何とか受け止める。
階段で滑ったのかな？
なんとか受け止められて良かった。
「大丈夫？アキちゃん」
吉野さんがそう言ってくる。
「うん、僕は大丈夫だけど、えーと君は大丈夫？」
そう言って抱きとめた人をみる。
制服からして女子、ドリルのようにロールした髪型の女の子だ。
「あ、ありがとうございます、美春は大丈夫で、痛っ」
「足挫いてるみたいですね、アキちゃん、保健室に連れて行ってあげたらどうです？」
「うん、そうだね、保健室まで連れて行くよ」

これじゃ普通に歩けないだろうし。

「え、でも、そんな迷惑じゃ……」

「怪我しているのを放っておけないよ」

そう言ってその女の子に背中を向ける。

「待ってアキちゃん、スカートだから、お姫様抱っこじゃないと」

「あ、そうだね、えっと良い？」

そうだよね、スカート短いし、おんぶだと見えちゃうよね。

「え、はい、あの……ありがとうございます」

「じゃあ、行こうか」

そう言って女の子をお姫様抱っこして保健室に連れて行った。

「……アキお姉様、美春惚れてしまったかもしれません」

「えっと、何か言った？」

「い、いえなんでもありません」

第五問（後書き）

明久×美春がやってみたかった後悔はしていない。

第六問

清涼祭も無事に終わり、あと二週間で七月に入る。

しかし清涼祭二日目は凄かったな。

長月中学の元手芸部が勢ぞろいでアキを見に来るとは思わなかった。

アキの女装姿は似合い過ぎているからしょうがないし、パワフルな人ばかりだから仕方ないが。

ちなみにアキちゃんに関してはうちのクラスで最重要機密になってるから謎の美少女扱いになっている。

コウによると写真はかなり売れたらしく、その関係でだ。

男だと分かると売れなくなるかもしれないかららしい。

美人な上に勉強もできるということで有名な霧島さんや姫路さんと同じぐらい売れたらしいから、相当な物だろう。

ちなみにうちのクラスが売り上げ一位を獲得して片付け免除になった。

そして現在は夕食時で目の前では俺の作った夕食をアキが食べている。

今日は俺の当番で明日はアキだ。

お互い手伝ったりしているのであってないようなものだけど。

「そういえば、来月は期末試験だな」

来月の学校の行事予定を思い出しながらそう言う。

「あれ、そうだったけ？」

「ああ」

「そっか、でも試験召喚戦争は二年からだし、適当にやればいいんじゃない？」

「そうだな、一年で重要なのはクラス振り分け試験って言われてるから、俺は別にいいと思うぞ」

まあ、アキは基本的に遊ぶことの方が好きだし、こうなるよな。

俺は適当にやればある程度点数は取れると思うし。

というかテスト中に寝る可能性もあるから、俺の場合試験とか微妙だしな。

「それに僕の場合はいざとなったらこれがあるから！」

そう言ってアキが鉛筆を取り出す、どっから出したんだ？

「ストライカー・シグマＶ、これがあればテストの一つや二つ何とかなるよ！」

「鉛筆転がしはその日の運に左右されるから、ちゃんとテレビの運勢チェックを見てからやった方が良いぞ？」

我ながら論点が違う気がするが……まあいいだろう。

「ふふふふ、大丈夫だよ眞也、あと二つ、ストライカー・シグマＶと同じような物を開発中だから！」

どうしよう、いつも思うがこういう時はどう答えればいいかわからない。

「そっか、それなら、安心だな」

「うん！」

「まあ、テストの話は置いといて……話しは変わるけど明日演劇関係でヒデに頼まれた事があるから、先に帰っててくれ」

「秀吉に？」

「ああ、衣装関係で繕い物があるらしく頼まれた」

「僕も手伝おうか？」

「いや、結構少ないみたいだし、一人で大丈夫だ」

コウなら俺より早くできるんだろうが、コウは用事があるらしく駄目で俺に回ってきた。

「わかった、じゃあ、明日は先に帰ってるね」

「じゃあ、アキ、夕食までには帰るから、頼んだ」

「じゃあのう、明久」

帰りのＨＲが終わって眞也と秀吉がそう言ってきた。

「うん、わかった、じゃあね、眞也、秀吉」

雄二もムッツリー二も用事があるらしく帰っちゃたし、僕も家でゲームでもしようかな。

あっ、でも冷蔵庫に食材がなかったから買って帰らなくちゃ。

何を作ろうかなと思いながら僕はスーパーに向かった。

「さてと、何を買おうかな」

昨日は魚だったから今日は肉料理がいいかな？

肉料理だと肉じゃがとか焼肉とかが良いかもしれない。

家には……確か人参があったから今日は肉じゃがにしよう。

そう思い籠の中にジャガイモ、玉葱、しらたきなどの材料を入れていく。

「あっ、吉井」

声のした方を向くと島田さんが買い物袋を持って立っていた。

もう買い終わって帰る途中なのかな？

「島田さんも買い物？」

「うん、ソウだけど……如月は？」

辺りを見回しながらそう言ってきた。
大体眞也といるから、セット扱いにされているみたいだ。
中学でもそうだったから別に気にしないけど。
「眞也なら秀吉に頼まれて演劇部の手伝いにいったけど？」
「ソウなんだ……ネエ吉井、聞きたい事があるんだけど？」
そう言って真剣な顔で迫ってくる。
なんだろう？
「如月って何が好キナの？」
「えっ？」
えっと眞也の好きなもの？
なんで眞也の好きなものを聞くんだろう？
「ほ、ほラっ、いつも如月にはお世話になってるカラ、何かお礼をと思って」
「あ、そうなんだ」
少し焦って顔を赤らめながら島田さんがそう言ってくる。

そういえば授業中でも島田さんが言葉に詰まっていたら眞也が助けてたっけ。

今では結構少なくなってるけど。

「それで何がイイかなって」

「うーんと眞也の好きなものは……甘い物かな」

「甘い物？」

「うん、眞也は甘い物好きだから、お菓子とか自分で作るぐらいだしね」

反対に辛い物は苦手なんだよね、一応食べられるけど、できるだけ食べたくないって言ってるし。

「ソッか、甘い物か……うン、わかった、ありがと吉井、じゃあね」

そう言って島田さんはスーパーから出て行った。

さて僕も買い物を続けようかな。

「買い物は終わったけど、どうしようか」

買い物も終わってスーパーの前でどこに行くか考える。

荷物もあるしこのまま帰ったほうが楽だけど、せっかくだしゲームショップでも行こうか。

新作ゲームの情報とかあるかもしれないし。

そう思い歩き始める。

「ディアマイエンジェル！」

そんな声が突然聞こえたので振り返ってみると。

変質者がいた。

エプロン付けた男の人が女の子を追い掛け回しているから変質者決定でいいよね？

女の子も全力で逃げてるし。

えーと、変質者がいたら、１１０番だっけ、あれ１１９番？

「こんな時こそ眞也だよね」

携帯電話を操作して眞也に連絡する。

「あ、眞也？」

『どうした、アキ？』

「変質者がいたんだけど、１１０番と１１９番どっちだっけ？」

『警察は１１０番の方、でもその前に周囲に警官がいないか見た方が良いぞ』

眞也にそう言われ辺りを見回す……いた。

「いたよ」

『じゃあ、その人に話しかけるか叫べば大丈夫だと思う、あと絶対に怪我しないようにな』

「うん、わかった」

『あと無理、無茶、無謀な事はしないでくれよ、頼む、あ、やば……』

「眞也、どうしたの？」

『……』

……あれ、返事がこない？

『……明久か？』

「あれ、秀吉？」

突然秀吉の声がした。

『うむ、眞也が寝てしまってな』

電話の最中に寝ちゃったのか、今日は授業中にも寝てたのにな、後で迎えに行かなきゃ駄目か。

「そっか、じゃあ、後で迎えにいくね」

『ふむ……わかった、まだ時間もあるしの、起きなかったら連絡するのじゃ』

「うん、ごめん秀吉、じゃあよろしく」

そう言って電話を切る。

さてと……叫べばいいんだよね？

「すいませーん！変質者です！変質者が女の子を追いかけてます！」

「むっ、どこだね少年」

僕の声を聞いて向かってきた警察官の人がそう言ってきた。

「あっちの角曲がりました、エプロン着けている中年です」

「そうか、危ないから君は着いてこないようにな」

そう言って警察官は走って行った。

「こらそこの男、止まりなさい！」

見つかったみたいだ。

これで一安心かな？

「む、誰だ僕の可愛い天使との邪魔を……するな！」

そんな声が聞こえると同時にドンッという音がした。

「何だと！？くっ、だがこの程度の速さで私を倒せると思うなよ！」

今度はヒュッという音が鳴り響く。

何かすごいバトルが始まってる！？

「あの……」

見に行こうか、見に行くまいか。

「あの、聞いてますか？」

巻き込まれたら痛そうだし、止めとこうかな。

荷物もあるし。

「あの！聞いてますか？」

「うわ！」

突然耳元で大きな声を出された。

「ようやく、聞こえたようですね、あなたが警察を呼んだんですか？」

そう言って話しかけてきたのはドリルのようにロールした髪を左右に垂らしている女の子だった。

「え、うん、そうだけど」

あ、追っかけられてた女の子か。

「ありがとうございました、本気で助かりました、全くあの豚野郎ときたら、一回豚箱にでも入ってればいいんです！」

そう言って凄い音が鳴っている方向をにらめつける女の子。

戦いはどうなっているんだろうか？

凄い気になる。

「とりあえず、お礼は言いましたし、美春は帰ります……お姉様を探さなくてはいけませんし」

「え、あ、うん」

そう言って女の子は全力で走っていった。

「僕も帰ろ」

なんか疲れたからゲームショップは今度にしよう。

夕飯も作らなくちゃいけないしね。

そういえばあの女の子どっかであったような気がするけど……どこだっけ？

そう考えながら大きな音が鳴っている方向から背を向けて僕は帰る事にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4375m/

バカとテストと召喚獣　居眠り病の幼馴染

2011年8月18日09時48分発行